

現代日本は行き詰まっている。将来への見通しが立たず、安定的に安心できる現在はないと、人々は口々に言う。あらゆる場面で他者から責められることに怯えながら、関係を結ぶのが苦手なものはその場から去っていかざるを得ないと思わせるような、また社会の認める能力や成果を出せない、あるいは出せなくなった人を不要と見てしまうような、そんな目差しに溢れている。生きる選択肢を失ったと思い、自ら人生を閉じていく人(自死)の数が十二年連続して三万人を超えている。これは、一年間に交通事故で亡くなる方の数倍、殺人(他殺)の数十倍にも及ぶ。自分の部屋から出られない人、心を病んで治療に通う人は、自死者の数十倍といわれる。その行き詰まりは、過去の人間の営みの結果であるとともに、現代の社会を構成している私たち一人ひとりの意識・志向・価値観の歪みである。私たちが本当に大事なことを横に置いて、眼前を自分の都合に合わせることにのみ汲々としてきた。

人間に生まれた限り、いかなる時代状況であれどんな社会情勢であれ、その中で生きていかなければならない者として、学ばなければならぬことがある。自分として明確にしなければならぬことがある。それが明確になった人の言葉として、「慶ばしいかな。心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」(親鸞『教行信証』)がある。そこから「樹心」の語をもつて本校は教育理念としている。その「樹心」を本校初代校長の清沢満之先生は「自己の信念の確立」とおっしゃられ、また「自己とは何ぞや。是れ人世の根本的問題なり。」とおっしゃられた。人間に生まれたこの私自身はどういうものであるのだろうか。自分が人間にそしてこの自分に生まれた意義を知りたい。自分はどこから来て今どこにいて、そしてどこへ行くのか。どこに足を於けば安心できるのか。そういうことも自ら考え確かめた方々のご苦労に学ばねばならない。

長い鎖国が破られて、近代の幕開けとともに海外特に西洋から様々な書物がもたらされた。勿論、日本語に翻訳などされているはずもない。そんな中、先の清沢先生はソクラテス・プラトン以来の「汝自身を知れ(自らの無知を知れ)」という人間探求を更に深め、後の哲学の流れの源流となったエピクテトスに注目された。様々な書物・文献が未整理のままいわば無秩序にもたらされる中、慧眼というほかない。そのように、出会う様々の中にきちんと大切なものを感じ選び取っていく力、それは一種のセンスとも言うべきかもしれないが、そういう見抜く力をどのように養うかが大問題である。先生は、また親鸞聖人の言行録で数百年間も人の目から遠ざけられていた『歎異抄』、小乗仏教として軽んぜられていたが実は釈尊の息づかいが感じられる『阿含経典』の重要性に着目し、エピクテトスの著作と併せて「余が三部経」と称しておられました。

そういう目を見る目を養うために、教養が必要である。今までに学んできた一切が自分の教養となる。今その必要を感じていないことも含めて、一切が相乗的に意味がある。どの知識も他に応用され得るのだ。その一切をもつて、私は現前の世界を見ている。ですから、同じ対象を見ても、それぞれの教養によって見え方・重要性・応用可能性などは異なる。私たちは生まれて以来、学び続けている。それは言葉によるもののみならず、身近な他者から、また環境やあらゆるものから、様々に学び感じ吸収している。また自分自身の身体から教えられることがあり、時間的にも空間的にも遠く隔たっている人から学ぶことも多くある。学力とは、学んだ結果の質量ではなく、学ぶ力のことであろう。出会っているものの中に学ぶべきものを感じ取り、関心を寄せ、受け入れる。

あらゆる学びが、どんな状況の中においても「今ここに他者とともにいきいきと生きていく」を裏付け支えることにつながる。目を開き、ちゃんと自己と他者と世界を見て考え学ぼう。その意志が見る目を養う学びへと自分を向けてくれる。